アイヌ文化体験学習のみちのり

―旭川竜谷高等学校郷土部1967～2004―

8月5日（木）13：30～15：00　東京会場

講　師　福岡イト子　財団法人日本私学教育研究所客員研究員

福岡と申します。現在、八王子市にあります財団法人日本私学教育研究所の客員研究員を務め、北海道で特色教育「アイヌ文化教育」をテーマに、総合学習や講演、それから執筆活動を行っております。また、アイヌ文化環境保全対策調査委員として、沙流川流域の調査にも入っております。

ここでは、旭川竜谷高等学校の顧問として1967年から、生徒とともに歩みはじめた『上川アイヌの研究』の25年間、そして私の後を継いでくれた1984年度副部長、現顧問・本間愛之先生の1991年から2004年に至る「アイヌ文化体験学習のみちのり」をご紹介し、学校教育の一環であるクラブ活動を通して生徒たちがどのように自己変革していったのか、37年間にわたるアイヌの人たちとの心の交流をいくつか挙げ、お話ししたいと思います。

はじめに

継続テーマ『上川アイヌの研究』にいたる経緯

郷土部の生徒たちによる自主的な部活動『上川アイヌの研究』は、開道百年を翌年に控えた1967年に始まります。そのころ、北海道では明治2年（1869年）8月15日、蝦夷地を北海道と改められてから百年目を迎えるに当たって、開拓の歴史を記録する必要性や文化財の保護が叫ばれていました。

50名を越える部員たちは、「北海道に開拓の鍬が振り下ろされて百年目というけれども、私たちが住んでいる身近なところに、私たちが知らない歴史や文化を持った人たちが現実に存在している。そこには、アイヌの文化を確かに伝える誇り高い古老が生きている。おかしいのではないか」。と、問題意識を持ち始め、「いま私たちが生きているこの大地に、それ以前アイヌの人々がいて、私たちにどんな文化をもたらしたのか。それを受け継ぐことによって、北海道に生きる人間としてどうかかわっていったらよいのか。」ということから、アイヌ文化の研究がフィールドワークとなりました。フィールドワークは好奇心を触発するものです。

しかし、その当時は、「滅びゆく民族」という世の風潮もあって早急に記録に残しておかなければならないという逼迫感、義務感のようなものがあったことも事実です。

Ⅰ　アイヌ文化体験学習「自分の頭で考え、自分の足で歩き、自分の手で創る」

問題提起 → 古老からの聞き取り → 体験 → 実証 → 考察 → 記録に残す

活動は一貫して体験学習であり、「自分の頭で考え、自分の足で歩き、自分の手で創る」をモットーに、問題提起 → 古老からの聞き取り → 体験 → 実証 → 考察 → 記録に残すという調査方法のプロセスを重ねることにしました。

その年に、日本国有鉄道第3次長期計画により函館本線札幌～旭川間の電化複線化工事のため、旭川郊外にある嵐山遺跡が破壊されることになり緊急発掘調査が行われました。旭川市教育委員会から北海道高等学校文化連盟上川支部郷土部に要請依頼があり調査に参加しましが、遺跡付近でオプニレ（野生生物の霊を送る場）が発見されました。

*木を燃やした跡にイナウ2本、ヒグマの頭骨のない一個体、エゾノウサギ13個体（1969・報告）

嵐山はアイヌの人たちがチノミシリ（われら・祈る・山）と呼ぶ聖地であることがわかりました。
そのときからエカシ（おじいさん）やフチ（おばあさん）と連れ立って歩く嵐山はアイヌ文化研究のフィールドであり、アイヌ文化を学ぶ私や生徒たちにとって動く教室でもありました。

「上川アイヌ」というのはペニウンクル＝川上の人、つまり、石狩川の上流に住む人をいいます。北海道のほぼ中央に位置する上川盆地は、旭川市を中心都市にかかえる北海道内で最も大きな盆地です。その東には旭岳(海抜2,290メートル）を主峰とする大雪山連峰が連ねています。山々からの雪解け水は幾筋もの川となって上川盆地を潤し肥沃な土地を形成しました。大雪山連邦の一つの石狩岳を源流とする石狩川は、旭川市忠和村付近で支流の忠別川、美瑛川、牛朱別川、オサラッペ川を集め、旭川郊外の神居古潭で山地を浸食しながら、激しい流れとなって抜け、石狩平野を経て石狩湾へと注ぎます。

この上川の地の豊かな川の流域にコタンを形成し、自然とともに暮らしていた人々はイオル（それ・なか：狩猟圏＝食糧資源獲得の場→伝統的生活空間）を持ち、自然からモノをいただき、自然からの贈り物に感謝して生きてきたこ

とを知り、「アイヌとは本当の人間ということだ。ここにオオウバユリがあるだろう。10あれば6つ取って4つ残して置く人のこと」と教わったのも嵐山でした。
部活を始めるに当たって一番困ったことは、私たちがアイヌ文化を歴史的に考えようとするとき、アイヌの人たちは文字を必要としなかったため、アイヌ文化の担い手による記録が残されていないことでした。顧問の私自身、異文化をどんな方法で学んだらよいのか理解できず「わからないことがわからないまま」手がかりを求めて部員たちと旭川市郷土博物館に行くことになりました。そこにはハンズオフの実物資料：アイヌの人たちの生活用具がガラス越しに陳列されておりました。生徒達は「モノが何を素材とし、どのようにして作られたか、誰がどんな思いで作ったのだろうかなど、精神的なメッセージが伝わって来ない」と言い始めました。松井恒幸館長は早速、アイヌの人たちとの交流の場を設けてくださったのです。

研究テーマは部員たちの問題意識から自然発生的に生まれ、調査方法は今まで学者や研究者が目を向けていなかった空白の部分「一つのモノが作られてプロセスを記録し、モノを通してものの見方考え方、心＝精神文化を身につける」『体験型・実験民族学的研究』としました。

折しも旭川市では、1969年からアイヌ文化の保存と伝承の場“アイヌ文化の森・伝承のコタン”造成計画が持ちあがり、アイヌの古老の指導でウラシチセ・笹の家一棟「信仰・祭儀のチセ」を有識者グループと作ることになります。時の市長は後の内閣官房長官・五十嵐広三さんです。(1971年完成) ここでは、昔のアイヌの人たちの文化や生活の技術を受継いでいく目的のもと、アイヌの人たちが中心となりアイヌ文化の理解と普及を目指していました。

これまで集まる機会が少なかった市内のアイヌの人たちも定期的に「伝承コタン」に集まり、失われゆく儀式などを自ら受継いでいこうという話しも進められました。

この時から37年にわたるアイヌの人たちと部員との心の交流はさらに広く深まりました。

Ⅱ　「見て覚えろ」「考えればわかる」　*活動目録から「手は心を伝える」

ここでは、*活動目録から同一テーマを上げ、Ⅱ「見て覚えろ」「考えればわかる」*活動目録から『手は心を伝える』と、Ⅲ「アイヌ語っておもしろい」、Ⅵ「アイヌの人って偉いなぁ、尊敬しちゃう！生きる支えです」を合わせて部活の様子からご紹介したいと思います。

エカシ（おじいさん）やフチ（おばあさん）は私たちに何かを教えるときには決まって「見て覚えろ」「考えればわかる」といいます。

忘れまいとすぐにノートに書く私にばあちゃんは、「どうして頭で覚えられないのか。頭をからっぽにしておくとウェンカムイ・悪い神がその隙間に入り込む。だから、いつも頭をいっぱいにしておくんだ。生徒の方がよっぽど覚えがいい」とよく怒られました。教師として本当に心しなければならないありがたい助言でした。

さて、総合学習でも子どもたちに大受けするのがムックルです。上川地方ではこう呼びますが一般的にはムックリのことです。

1）　ムックル

＜§モノ＝ムックルを鳴らす　2点＞アイヌ・フィリピン

その10　生活と植物（利用編No.1）
　　―ムックル mukkur 口琴を作る―（1976）
その38　mukkur ムックル 口琴を作るⅡ　ムックルからみたアイヌの人びとの精神文化（2003）

民族の心を奏でる伝統的な楽器です。口に共鳴させて演奏する楽器で日本語では「口」の「琴」と書き「口琴」といいます。

作るのは男の人で愛しい女性への思いを込めて竹を削り、意中の女性にプレゼントします。材料は身近なところ、大雪山麓の比布、愛別、神居古潭に自生する自然の素材、根曲がり竹・チシマザサを使います。材料は山に入る前に「今日はムックルの材料の根曲がり竹をいただきます」と心に思い、根曲がり竹を前にお酒を入れたトゥキ（高杯）とイクスパイ（棒酒箸）をシランバカムイ（土地の神）、シリコロカムイ（樹木の神）にお祈りしてからいただきます。竹の根本やルウェトゥ（太い竹）は肉が厚く鳴らないので薄い部分つまり先端や細い竹を選んで作るととてもよい音・ハウェピリカがするといいます。さらに乾燥させると共鳴度がよくなります。

また竹片は必ず一方に節を付けて使用します。これはリード（弁）の溝を削るときの割れを防ぐためと、鳴らすときに糸を強く引っ張っても竹が割れないようにするためです。ひも（アッ）に使う繊維は、エゾイラクサ・ｈａｙハイを利用します。10月末、すっかりトゲの落ちたエゾイラクサを刈り、皮をはいで乾かした繊維をよってひもにします。

作り方は竹片を0.9㎝から1.5㎝幅に割り、長さを決めます。長さは男の手で右手の人差し指、中指、薬指の3本が3回おさまるのが適当で、13㎝～16㎝くらいになります。次に竹の裏の肉を削りとり薄くします。昔は、十勝石（黒曜石）を薄く割ってナタがわりにしてムックルを作ったそうです。今ではナタ、小刀、キリを使用します。

リード（弁）をはじいてよい音が出れば両端にひもを付け右端の節がある方の穴にとおした糸の先に3㎝から4㎝の竹片を結び付けます。振動板・リード（弁）の削り具合によって音のよしあしが決まります。

鳴らし方は「口の開き方」「舌の転がし方」「息の吐き方・吸い方」、「右手の動き」によって新しい音＝私の音が生まれます。

奏でるのは女性で愛している彼への思いを吹き込みます。するとムックルのリード（弁）＝パルンペ（舌）が、私の舌に代わってあなたへの思いや願いを相手に伝えるといいます。遠くへ狩りに出かけたムックルを作ってくれた愛しい彼へ「あぁ、雨が降っているが山でどうしいるのかなぁ」と雨だれの音、クマと犬との戦い、犬の鳴き声を吹き込みます。心がこもった音は私の音です。

2003年度のテーマはムックルからみた精神文化ですが顧

問の先生は「作るのに一生懸命であとは何もない。それでいいの？」と言ったら「身近なところで口琴が使われていた」と、ＣＤを持って来たといいます。

＜ＭＤ＞　§２曲鳴らす

アニメ「ど根性ガエル」の主題歌とマカロニウエスタン「夕陽のガンマン」クリントイーストウッド主演テーマソングの一番最初に口琴が出ています。

後日談ですが、ここで審査員の肩が揺れたとか？見事、６年連続最優秀賞を獲得しました。顧問が、賞状と優勝カップをぜひお見せしたいと私のところに部員と見えたのでお祝いに小樽のお寿司をご馳走すると一人の部員が立ち上がって、「元顧問と現顧問との再会に感激しました。先生に私の思いを込めてムックルを捧げます」というのです。ビューン、ビューンとハルンペを通して心が通い合い、教育とは感動だと思いました。

その後、小学校の先生方から「修学旅行でムックリを作ったけれど精神文化が伝わってこなかった」というので小樽市内の小学校・社会科部会で「手は心を伝える」をキーワードに旭川竜谷高等学校郷土部の研究を紹介しました。

● 自然からいただいた根曲がり竹でムックルを作りましたが、植物を利用して子どもの遊び道具を作りました。

＜スライド１＞*一枚のみ

２）子どもの遊び　４枚目をご覧ください。*『しらかば』「おもちゃの小弓におもちゃの小矢」

その15　子供の遊び（1980）
その16　続子供の遊び（1981）
その34　子供の遊びⅢ―エルムウポポ・ホーチップ・モムモム―（1999）

これは市立桜小学校３年生の総合学習「地域の歴史と文化を学ぶ―アイヌの人たちの自然に根ざした伝統文化」で「ユカラって何ですか？」に答えたもので一年間連載の予定です。

アイヌの少女・知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』「銀の滴降る降るまわりに」のなかに「**おもちゃの小弓と小矢**」があります。そこからどんな材料でどうやって作るのか？遊び方は？ルールがあるのか？アイヌの子どもたちにとって「遊び」とは？他にどういう遊びがあるのだろう？遊び道具を作って遊んじゃおう？ということになりました。

◆男の子の遊び

◎カリㇷ゚（輪）で遊ぼう！！

・クエシノッ＝ク・エ・シノッ：弓・でする・遊び

ヤマブドウの太い蔓（10～14㎜の蔓）で作った、直径20～40㎝のカリㇷ゚（輪）を空中に投げ、それを的に弓矢で射る男の子の遊び*だんだんと輪を小さくしていきます。

材料…弓＝クネニ＝弓にする来

「イヌガヤだ」「へーい。木（気）がつきませんでしたぁ。これを適材適所というものか！アイヌ語っておもいろいなぁ」「すげぇーなぁ。アイヌの人って…」

＊イヌガヤ：イヌガヤ属

カヤに似るが核が苦しくて食用にならない。

本州岩手県から九州、および朝鮮半島、中国に分布。緩やかな山地や平地の林の中にはえる常緑低～小高木。高さ10m、樹皮は暗褐色、浅く縦に裂目がある。枝は横に広がり、小枝に溝がある。葉はラセン状に互生、側枝は互生して２列、長さ３～５㎝。花は３～４月、雌雄異株。

＊考古学的：余市・安芸遺跡

縄文時代後期・約3,300年前

イヌガヤの短い弓５本出土。

縄文時代の弓の自然素材はイヌガヤが多い

矢＝危険のないようヨモギの茎やカヤ、ススキ

子は親が作っている様子をよく見て覚え、自分で作ることによって様々な道具の使い方を身に付けていきました。

・ウコカリㇷ゚＝互いに輪を受ける遊び

空中高く投げたカリㇷ゚を１m50㎝くらいで先が二股になった木の枝カリプペカㇷ゚（輪差し棒）の先で上手に受け止める男の子の遊び

総合学習で、「男の子の遊び」「女の子の遊び」と分けると先生方は「そりゃぁ、今はダメなんです」「それって、ジェンダーってこと？」「そうです」

二つの遊びから…輪＝獲物　カリㇷ゚ペカㇷ゚＝槍、銛と考えると？子どもたち「男の子の遊びでーす。」「カリㇷ゚遊び」は狩に必要な技術⇒クマやシカ、川をさかのぼってくるサケ、マスなどの獲物を槍や弓矢で仕留めるための訓練であり、機敏性が養われる。遊びを通して狩猟、漁猟の日常生活に役立つ生きる技を覚えました。荒井源次郎エカシは「遊びは腕力、体力、忍耐力、そしてクマに立ち向かう勇敢さを養う心の教育」といいます。

◆女の子の遊び

・イペカラ＝食事・作る：ままごと遊び

母親やばあちゃんと一緒に山に入り山菜⇒食用としての野生生物…茎葉類、根茎類、果実類*木の実の採り方、「毒のある野草」の見分け方を採取の仕事を通して繰り返し繰り返し教わります。子どもたちはそれを習って、食用の草を摘んで遊びました。

・模倣画き＝小さいときからフチやハポ（母親）の針仕事を真似、炉の灰や砂浜などに指や棒で文様を描いて遊びました。描いては消し、描いては消しを繰り返し、友達と競い合うことで上手になり、自然にさまざまな文様を身に付けました。フリーハンドで美しい文様を刺しゅうすることが出来るようになります。刺しゅうの上手な女性はアシカイクルと呼ばれ、素晴らしい女性であるといわれました。

結婚の際、結納がわりにテクンペ（手甲）とホシ（脚絆）に美しく刺しゅうした品々を相手に贈り、戻ってこなければ一人前の花嫁として相手に受け入れられました。女性たちは、一針一針丹念に愛情を込めて刺しゅうを施します。アイヌ文様は魔物から身を守るものとして衣服に刺しゅう

され、アイウシ（トゲ）がある文を衿、袖口、裾にあしらうことによってそのトゲで魔物を引っ掛け体に入るのを防ぐと聞きました。

§モノ＝テクンペ　ホシ　テーブルセンター　3点

・エルムウポポ＝ネズミ・踊り

女の子の遊びの一つですが、イオマンテ・クマの霊送りなどの大事な儀式が終わった後、余興として子どもから大人まで男女の区別なく大いに盛りあがる娯楽でもありました。

＜遊び方＞

☆地面にガマで編んだ敷物・チタㇲペ、無ければ草を敷いてクルミなどネズミが好きそうなものを置く。

☆二人の人がひもに輪を作り、しゃがんでネズミがくるのを待つ。

☆親ネズミが子ネズミに従えて、クルミを盗みにやって来る。

☆ネズミは人間にモーションをかけながらワナの向こうにあるクルミをすばやくとって子ネズミに渡す。

☆人間はとられないようにひもを引いてネズミをワナにかける。

☆ワナにかかったネズミは負けとなり、列から抜かされる。人間の歌に合わせながら踊り遊ばれる。

ソンカイノ　子ども従えて
ソンカイノ　子ども従えて
ハ（ル）－キナ食物　　草
クース　ハーララア　　～ので　食物　散らばっている
ソー　ソクソク　床　　*ネズミの鳴き声

「リズムがあり、あくまでも遊びだから動作を面白くして、ネズミは一生懸命ごまこそうとする人間の体にさわったりして気をそらし、人間はそれにごまかされないようにひもを引くようにする」と杉村フサさんから教わりました。これらの遊びから女の子の遊びは手先がきいて細かい仕事が上手になるための訓練ということが出来ます。

3）　食　*近文・ちかぶみ

明治24（1891）年、旭川近文原野区画により、明治27（1894）年北海道庁は旧土人給与地を設定。近文アイヌの生活の保護と農業に従事させる名目で強制的に36戸を集団化しました。近文とはチカㇷ゚ウンイ鳥、大きな鳥（タカ、ワシ）の棲むところを意味し、アイヌ語に漢字を当てたのは岩村通俊長官であり意訳して「鷹栖・たかす」と呼ばれるようになりました。昭和4（1929）年2月、町名区画変更により、旧土人給与地及びその周辺を近文町、緑町（まち）、北門町と変更され現在に至っています。

その3　近文地方を中心とした食生活―植物・動物・食器―（1969）

その19　オオウバユリ・トゥレㇷ゚turepの根（鱗茎）の調理加工とでん粉の精製について（1984）

その28　近文地方の食生活―シケレペ（キハダの実）の調理加工

北海道212市町村名の約8割はアイヌ語地名に由来しています。アイヌ語を話す人びとは自分たちの言葉で、生きるために必要な食用植物のあるところ、サケやマス産卵場、クマやシカが通る道に仕掛け弓を置く地点、狩猟や漁労のため寝泊まりする小屋を立てた場所など地名を付けました。アイヌ語地名から「食生活」が読み取れることができることを知ったのは1969年です。

当時はさしたる文献が無く、いくら植物図鑑で食用植物を調べても分からないまま6月を迎えてしまいました。

そこで足腰の達者なばあちゃん・石山キツエさんを訪ねました。ばあちゃんは「山のもんはあるかなぁ。いや、あそこならきっとある」と確信ありげにスタスタと歩き始めた。とある沢に入るや否やアイヌ語の植物名を矢継ぎ早に言うのです。私はすぐアイヌ語の植物名を荷札にマジックで書き止め、草に結わえるよう男子生徒に指示しました。このとき、アイヌ語の植物名が食べるところ、つまり利用する部分、根、茎、葉と茎、葉、皮、木の実などの果実類などの部分だけを指して呼ぶことを知りました。

私は女子生徒とばあちゃんの後を追いましたが見失ってしまいました。すると沢頭の方から声がします。「おーい。早く来んかぁー。これを食わんからへこたれるんだ。」と口にはギョウジャニンニクをくわえています。生徒たちは「ばあちゃん。どうしてここに食べ物がたくさんあるってわかったの？」と聞くとにっこり笑って言うには、「アイヌはなぁ、食べ物に困らんようにちゃんと土地に名前を付けて置くんだ。ここはハルシナイ・食べ物がいっぱいある沢、っていうとこよ」「あぁ、ここは春志内かぁ、アイヌの人ってスゴい！。偉いなぁ。尊敬しちゃう」。ここハルウシナイ・食べ物が群生している沢に漢字を当てた春志内は今も残る地名です。

そして、ばあちゃんは「山のもんはカムイ（神が）アイヌ（人間）の役に立つように地上に降ろされた食べ物であり薬なんだ。カムイに感謝し、また来年もここに授けてくださいと祈ってから食べる分だけいただき、根は必ず残して置くんだぞ」と静かに語りました。私たちと生徒の目は驚きから感動へと変わっていきました。**『アイヌ文化を通して人間の尊厳を考える』ようになったのはこの瞬間からでした。**

翌年の1970年、5年計画で学校に「アイヌ植物園」を造成したのもこのときからです。

＜スライド2～19＞
キト・1、トゥレㇷ゚・17、シケレペ・1＝19枚

冬猟が終われば女たちの季節がめぐってきます。堅雪の下を軽やかな音を立てて流れはじめると、待ちかねたように老人や子供を伴い青物を求めて山に入ります。野生植物の中でもギョウジャニンニクとオオウバユリはハルイッケウ・食料の背骨といい重要な食料資源といわれています。

命を守る健康野草とは、2002年10月、洞爺湖がある虻田町健康福祉センターから『アイヌの人たちに学ぶ食生活』をテーマに講演依頼がありましたので「食用植物の利用について」お話ししました。

第16回健康まつりの一環でした。

＜スライド19－1＞　ギョウジャニンニク：ねぎ科　キトプクサキナ

アイヌ語地名⇒キトウシ・キトウシ＝ギョウジャニンニク・群生する・ところ：鬼斗牛*旭川東川「何にでも効く」

医学的分析：ギョウジャニンニクの茎葉…ビタミンCが含まれています。100ｇあたり600mg含有。

ビタミンA　食物繊維…生活習慣病の予防　疲労回復

ニンニク臭は命を守る…臭い「フラウエン・悪い臭い」を浴びて肺炎、風邪などの万能薬

＊においの成分⇒体脂肪を効率よくエネルギーに変える作用を持つ。つまり、持久運動能力を増進する働きを持っている。

＜スライド19－2＞　オオウバユリ：ゆり科トゥレㇷ゚・溶けさせるもの

アイヌ語地名→トゥレㇷ゚タウシナイ＝オオウバユリをいつも掘る沢

＜スライド19－3＞春先、つややかな葉を見せます。

＜スライド19－4＞花を付けたオオウバユリをオッカイトゥレㇷ゚・雄のオオウバユリと呼びます。

＜スライド19－5＞その下にうずくまるように自生するマツネトゥレㇷ゚・雌のオオウバユリの根を指してトゥレㇷ゚（溶けさせるもの）と呼びます。根にはでん粉をたっぷり含みます。

＜スライド19－6＞トゥレㇷ゚タニ・堀り採り棒

採取時期は6月末から7月にかけてで、地面が固い時には堀採り棒・トゥレㇷ゚タニを用いますが、手でズボッと抜けます。

＜スライド19－7・8＞トゥレㇷ゚

大人のこぶし大にもなるその鱗茎を堀り採取します。

＜スライド19－9・10・11・12・13・14＞鱗茎の処理

鱗茎は一片ずつはがして洗いウスで搗いて水にさらし一番粉、二番粉をとります。一番粉は下痢止めの薬として大切に保存しています。

＜スライド19－15＞二番粉*団子

二番粉をワッカクッタル・水の筒：ヨブスマソウの茎を斜めに切って流し込み炉に埋め蒸したもの

＜スライド19－16・17・18＞分離　①でん粉②残った滓・繊維

フキやヨブスマソウの葉にきっちり包んで風通しのよいところで発酵・乾燥させ、保存しました。

オンカ・発酵するとき、えもいわれぬ甘い匂いにハエがたかり卵を産み付けウジが発生してしまいました。ばあちゃんはウジが出ていけば食えるといいます。お粥に削ってトロミをつけたりや団子にして食べます。

この食べ方を知らなかった昔、それを歎いたギョウジャニンニクとオオウバユリが人間の女の姿に変えてコタン集落の長を訪ね、その後の食べる習慣が伝わったという話しがあります。*市立小樽図書館より『しらかば』5月号に“早く食べないと腐ってしまうよお”に書きました。

医学的分析：蛋白質*ジャガイモの2倍　ビタミンB2*滋養強壮　美容効果　イライラしなくなる成分

＊オオウバユリは、種子から芽がでた1年目はスーッとした細かい葉が一枚つくだけで、数年間は葉が一枚のままで毎年少しずつ大きな葉を付けるようになる。その後、次第に茎の数を増やしながら地下に養分を蓄えていき、養分が十分にたまったところで、その翌年はじめて茎を伸ばして花を咲かせる。葉だけの状態を雌、花が咲いた状態を雄と呼ぶ。（北海道開拓記念館・学芸員　水島未記）

1993年は部員全員が女子であったことから、女性の仕事として位置づけられている山菜・食用植物木の実の採取に着目し、シケレペ（キハダ・シコロの実）の調理加工の研究に入っています。

＜スライド19－19＞キハダ・シコロの実：みかん科　シケレペの実　シケレペ＝ぬるぬるした・もの（実）

例年のように杉村満さん・フサさんを講師に旭川市郊外・嵐山公園内にある“アイヌ文化の森・伝承コタン”のポロチセ（大きな家）の炉を囲み、シケレペを使った料理「シケレペラシケㇷ゚」の体験学習会を行ったと聞いています。

この料理はシケレペ＝和名キハダ・シコロ　ミカン科木の実を使い、カボチャやとら豆と一緒に煮込みトゥレㇷ゚でとろみをつけたものです。実だけを使わず必ず必ずラタシケㇷ゚にしますが、砂糖は絶対に入れないといいます。実をかじると、味はミカンの皮の味に似ていて苦味が強く舌の先がしびれますが、木によっては当たりはずれがあるようで、甘い実のなる木を覚えておくといいます。一度その味を知るとなぜか病みつきになる不思議な味がします。薬用として咳止め、嘆息、腹痛、朝昼晩一粒ずつ食べると胃腸によいし、赤ちゃんのカンの虫に、胸焼けのとき枝の先を萩、その樹皮をかじると口の中がしびれますがすぐ治ったそうです。

＜作り方＞

材料：採ってあまり時間のたっていないシケレペはそのまま使用できます。陰干しをして時間がたち小豆大に乾燥したものは一晩水につけ、もどします。この時のつけ水の1回目のものは捨てますが、2回目、3回目のつけ水に水あ

めや黒砂糖、ハチミツ、ザラメなどを入れて煮詰め咳止めの薬としました。

昔、クシが無かった頃、シケレペを取った後の房をいくつか集め、クシがわりにした。

① カボチャを5、6センチ角（出来上がりのときに形がかるく残るくらい）の大きさに切って置く。
② 金時豆やトラ豆を一晩水につけ、事前にくさみをとるために煮て置く。
③ ザラメ：本来はシケレペからでる甘みだけでよいが、好みに合わせてザラメの量を調節する。（砂糖は絶対入れない）
④ トゥレプ（オオウバユリの根のでん粉）味を整えトロミを出すために水に溶いて入るがトゥレプ団子にして入れる場合もある。
⑤ トウモロコシを入れてもよい。

調理

① 一晩中水につけて戻したシケレペを沸騰したお湯の中に入れ煮立てる
② 一煮だちしたところに皮をむいたカボチャを入れる
③ もう一煮だちしたところに事前に甘く煮ておいたトラ豆を加え全体が浸るくらいまで水を入れる
④ よくかき混ぜ、甘みをだすためにザラメを入れて蓋をし、煮立てる。
⑤ 水分がなくなり、カボチャに箸がとおる柔らかさになったら火からおろす。
⑥ 味を整えトロミを出すためにオオウバユリの根のでん粉を水で溶き、全体をむらにならにように混ぜて出来上がり

部員たちは必要な量だけいただき、シケレペを房から取るときも一粒でも無駄にすると怒られたそうです。料理のときシケレペを炉の中にこぼし、部員たちが「あぁ、あっ」と非難めいた声をだしたときフサさんの「火の神に捧げたんだよね。無駄になっていない。あなたはなぁんて優しい子なの」の言葉で生徒が変わったといいます。

§シケレペの実　1点

食器

その24　ヤラス　yarsu 木の皮・鍋をつくる（1989）

山猟のとき、白樺の樹皮で即製の鍋を作ります。春の堅雪のころのクマ猟や、初雪が降ってから、特に12月～1月にシカ、ウサギ、エゾリスの狩のとき、仮小屋を立て、そばにある白樺の皮を剥いで鍋を作ります。鍋に、乾燥保存しておいたギョウジャニンニク、ペカンペ（ひしの実）、ウサギの肉などを入れ塩味のオハウ（汁もの）を作って食べます。水の張ったヤラスは火に当てても燃えません。

◆ヤラス：写真ポスター

調理室で実験：「鍋焼きうどん」を作っちゃお！ガスコンロにかけると最初は鍋底に火がついてボウッと燃えたので、あわててとろ火でグツグツ煮ること25分…。良い匂いがただよいます。「解禁」の号令で一斉に箸を入れます。「ウーン。旨い。はるかに旨い。インスタントはいかん。甘味、木の皮の香りと味がする」。部員たちは大騒ぎです。水の張ったヤラスは火に当てても燃えません。アイヌ文化の学習で小学生に見せると、「どうして燃えないのだろう？」と先生方も首をかしげます。やがて、一人の女の子が手を挙げ、「はぁーい。燃えないんだから燃えないんでーす」。水が入っているため沸騰しても100度を越えることはない。そこで先生は総合学習で和紙を使って鍋を作り水を入れて実験したそうです。紙コップに水を入れ底にライターの火を当てて実験なさったらいかがでしょう。

4）はきもの

その5　はきものと交通　チェプケリ　cepkeri　鮭皮靴を作る（1971）

その27　ユッケリ　yukkeri　鹿皮靴を作る（1992）

1969年度「その3　食生活」からサケの皮で靴を作ることを知りました。

鮭をチェプ：チ・ェ・プ＝われら・食べる・ものといいますが、狭い意味で鮭、あきあじをこう呼びます。他に鮭をシ・イペ＝本当の、主な、食べ物、カムイチェプ＝神の魚と呼ぶことからアイヌの人たちにとって重要な魚であったことがわかります。

鮭の細部にわたる名称から鮭全体が生活に役立ち、捨てるところはしっぽの本当の先だけであったことも知りました。冬のはきものという食用以外の鮭の利用法を学ぶことによってアイヌの人たちと鮭の関わりや暮らしを理解したいと部活が始まりました。

1970年の夏、“アイヌ文化伝承のコタン”造成の際、市立旭川郷土博物館長・松井恒幸さんから尾沢カンシャクトクエカシがチェプケリの作り方を伝承していることを教えられじいちゃんの家に通いました。履く人の足に合わせ、一針、一針、心を込めて作ります。

§鮭皮靴*冬のはきもの　片方一つ

総合学習で子供達に見せると、「ひやぁ～初めてぇそれってぇ～」。「私は『幻の靴』と名付けます」底は背鰭はすべり止めに。「へぇ～すげぇ～よく考えてるよなぁ～」*北国に住む民族の生活の知恵「いつのころのサケが最も靴を作るのに適しているのですか？」の質問にじいちゃんは「萩の花の散る頃だ」ときまっていいます。花は季節を予測するもので生活の指標植物*フクジュソウ＝チライアッパポ・イトウがさかのぼって来る頃だからそろそろ猟の支度をしなければ、と花の蕾をみるということが分かりました。二冬履く、軽い

＊教材：「古典入門」教材…「えぞの話」『花月草紙』松平定信　文政元年（1818）　角川書店

「えみしの人に飯を与へしかば、いと喜びながら、そこら食ひこぼしげり。「やよ、おい米は玉の緒つなぐものなるを、などかくおろそかになすや。」と問へば、「われらは、

米食ひて命をまたうするにはあらず。鮭といふ魚食ひて生くるを。」と言ふ。「さらば、鮭の魚にて命を延ばゆるならば、それをばたふたふとぶべからむ。今、その足にはきたるものは鮭の皮ならずや。」と言えば、しばし頭にたぶけて、「君の足につけたまふわらうづとやらむは、かの米いで来る草にはあらずや。」と言ひしにぞ、「侮るまじきことよ。」と、人の言ひいしとぞ。わが国の人は、よそのことを知らねば、えぞ人のなりかたち、わが国の人とたがへば、いと愚かにて何知らぬものよと思ふたぐひぞ多き。それより、から国にてもあれ、えみしの人にてもあれ、ただすがたの見なれぬを見ては、腹かかへて、ことばのわきがたきを聞きては、また、笑ふ。心せばく、よそ見ぬゆゑなるべしと言ひぬ。」

なお、チェㇷゲリの使用は明治27年（1894）殖民地区画され翌28年4月に貸し付けの東川村、現在の上川郡東川町に香川県、富山県からの人たちが入植当初の頃、祖父が忠別川の鮭の皮を縫い合わせて靴を作った話が2004年7月7日の北海道新聞に載っている。文政年間、石狩イカウシ・チウベツの土人人口530人とある。土人はもともと「その土地にいる人」の意。

§鹿皮靴　ユㇰケリ　　片方1点

◆写真ポスター

冬のはきものに、チェㇷゲリの他、鹿の皮で作ったユクケリがあります。
毛が短く、しかも皮が厚いすねの毛皮を使いますが、一足作るには2頭分必要です。なお、明治の初めまで履いたといいます。

現顧問の本間先生は部員が学校内で部活は授業の延長みたいでいやだというのでいつもお世話になっている杉村夫妻を訪ねると、名寄市北国博物館の依頼で鹿の皮を使った衣服を再現しているという。そこで鹿皮靴がおもしろいのではないか？ということになった。過去の郷土部の資料「はきもの交通」を調べて見ると、「鹿のすねの毛皮で作った靴。冬、狩猟に行くときに防寒用として履いたといわれるが、写真を見ると毛皮が外に出して作られているのは、毛が雪や水をはじくためではないか？ユㇰケリは聞かれなかった」。とあった。簡単な説明であるが、部員たちに多くの疑問点を残し探求心を刺激するのに十分であったといいます。

杉村満さんは、「ユㇰケリの資料はあまり残されていないし、各博物館にも飾っていない」といわれたけれど、夏休みを利用して体験学習を行ったそうです。

本物の鹿の皮を用意できないので、ぬいぐるみ用のボアを使っています。縫い糸はエゾシカの腱を糸にします。冬に履くとしばれる*凍るので筋の糸だと切れないそうですがタコ糸を使っています。

出来上がって部員が毛皮を内側にはき、「あったかぁ～かーい」と叫んだところ、それは反対で毛皮を外にするのです。「毛並みの向きはかがとの方にする。そうすると登り坂では毛が雪に食い込んで滑りずらくなり楽に歩ける。逆に下り坂では雪の上を滑るように下っていくことが出来る」。といいます。

まとめのなかで今回特に感じたことは、今までの研究の中ではアイヌの人たちの自然からの採集に当たり、そのものに神を感じ、「‥の神様、‥をいただきます」と感謝を込めて採取し、また倒した動物の処理に当たっても儀礼を行い神に感謝した。ユㇰケリの材料である鹿においては例外だ。これは容易に手にはいるから、神の助けをかりなくても‥」と述べています。このことについてはアイヌ文化振興・研究推進機構・秋野茂樹さんがいい論文を書いてらっしゃいます。

5）踊り

その20　古式舞踊Ⅰ―文献から―（1986）
その21　古式舞踊Ⅱ―ウエカップウポポ・チカップウポポ―（1967）
その32　古式舞踊Ⅲ―文献調査―（1998）
その33　古式舞踊Ⅵ―エムシウポポ・ウコウㇰ―（1998）
その35　男の踏踊　―タㇷカㇲ　tapkar―（2000）

1984年1月21日文部省告示第12号に「アイヌ古式舞踊」が指定され、旭川チカップアイヌ民族文化保存会が設立します。翌年1月15日から17日まで、28年ぶりに行われたイオマンテの再現をきっかけに調査を始めました。

古式舞踊は深い信仰から生まれたものが多く、「信仰」と「芸能」と「生活」に結びついています。
文献調査から「踊り」は単なる楽しむための遊戯的なものではなく「祭り」とともに派生した自然への感謝がこめられていることを知りました。

全道大会で部長は「実際に踊らなければ心がわからない。来年は踊ります」と決意を述べました。

◆写真ポスター左上　チカップウポポ（鶴の舞）
*模擬歌舞：動物のしぐさや声を真似て歌い踊る

チカㇷcikap*カラスぐらい以上の鳥*サロルンチカㇷ葦原の所にいる鳥・ツル（タンチョウヅル）ウポポ・日高管内では「坐り歌」立ち上がって踊る「リムセ」。旭川近文地方では区別せず総称して「ウポポ」と呼んでいます。

近文のコタンクㇽ（村おさ）が大雪山へ狩りにいった際、鶴の巣ごもりの美しい姿を見て感動し、その様子をコタンの人たちに話したことから「鶴の舞」が生まれたという言い伝えがあります。

6人の女たちで踊りますが、真ん中の子鶴が向かい合ってホロホロと鳴き、中の子鶴は手拍子をとってアウサァハオォと歌い、親鶴は中の子鶴の肩を軽くたたく。やがて立ち上がると着物の袖口を指先で押さえて翼のように振りかざしながら、飛び交うように踊ります。これは子鶴が親鶴に育てられた後、幼い翼を振って飛び去っていく姿を表したものです。
指導：鶴の気持ちになること。親鳥は雛鳥をあたたかくい

つくしみかばう気持ちで… 親鳥は雛鳥が離れていってもいつまでもじいと雛鳥をあたたかく見守っていることなど、教えは厳しく細かいところまで体でしっかり覚え込むまで何回も何回も指導してくださった。教える方も教わる方も汗だくで翌日足が上がらなくなった。本物になったと言われた。ＮＨＫラジオで全国生中継でも放送され喝采を浴びた」。山本美貴さんのホロホロ‥の感想

◆ポスターの中心　1998年「剣の舞・エムシウポポ」

毎年５月、嵐山にある“アイヌ文化の森・伝承のコタン”でチノミシリカムイノミ（聖なる地でのお祈り）に参加させていただいています。厳粛で重厚な儀式の後、ポロチセ・大きな家で行われる祝宴は部員にとって楽しみだと聞きました。

「採れたてのギョウジャニンニクと鹿肉の入ったジンギスカン、紅鮭のチャンチャン焼き、キハダの実をカボチャとトラ豆に混ぜて煮るシケレペラタシケプ、茹でたジャガイモにイクラを混ぜて作るイモ・チポロなどふだん口にすることが出来ない美味しいものをたくさんいただく。祝宴が盛り上がりを見せるころに行われる歌や踊りには、音色の美しさや踊りの勇壮さに感動する。踊ることによって精神文化を感じ取ってみたい」。

エムシ・剣　ウポポ・歌舞　*儀式のときに歌い踊る

女性たちが歌うなかで、戦いに出陣する男性２人が抜き身を持ち、互いに刀を打ち合わせて勇壮に踊るものです。また、災害や病気など人間に不幸をもたらす悪い神を威嚇し、退散させるときにも踊る。

● この舞は上川独特のもので、コタンを覆う悪いもの（水害・病気・熊や鹿が獲れない等）を追い払うという意味の通りです。

◆ポスター写真

☆ 悪霊を祓ってくれた剣・つるぎに６回感謝を込めて祈る様子（中央の写真）

☆ 歌が終わると、コタンの神々に感謝のお祈りをする

この年、平成12年は西暦2000年という20世紀最後の年であり、また1890年（明治23年）旭川村が設置されてから110年目を迎えました。旭川市では開村以前のアイヌの人びとの歴史と行政体としての110年の歩みを両輪とした「ふるさとの歴史を顧みる記念の年」と位置づけ、市民ぐるみのさまざまな事業が行われました。

郷土部では嵐山にある“アイヌ文化の森・伝承のコタン”でのチセ・家建て替え作業、「アイヌ文化交流会」「北海道アイヌ古式舞踊の祭典」などいろいろなアイヌ文化伝承事業に参加し「自らの手でつくること・ふれあい交流・各地の伝承文化体験」という素晴らしい経験をしています。

そこでク・リムセ＝弓の舞を見て杉村満さんに相談したところ「あれは近文アイヌに伝わるものではない」。と、昭和35年ころ（1960）から踊られなくなったタプカラ＝タプ・擬声語、カラ・発するタッタッという音を発する男の踏舞を父親の尾沢カンシャトクが踊っていたことを最近思い出したと語りました。実に**40年ぶりに、それも郷土部の生徒たちによって再現された**のです。

自然との関わり合いのなかで多くの恵みを与えてくれるものを「神」とあがめ、自分たちを守ってくれる存在の神を「善い神」であると考え、感謝の気持ちを忘れなかった。しかし、自然は常に恩恵を与えてくれるだけの存在ではない。逆に「善い神」を上回るほどの力を持ち、人間の生命を脅かす「悪い神」の存在としての「魔神」（水害・疫病・火災・熊や鹿、鮭や鱒が捕れないなど）もいた。歌舞はこうした生命を脅かす敵である「魔神」を威嚇し追い払い「善神」の助けをお願いし生き抜いていくため。

タプカラは床を踏む音によって「善い神」を振り向かせ「魔神」を威嚇して遠ざける呪術的踏舞、杉村満さんは腹の底から独特の声をだした。部員たちは「今年はこれしかない」と体験学習会に入ったという。

この年に私は高等学校文化連盟郷土研究大会の審査員を務めましたが、まとめで、

① 「アイヌの人たちと楽しく踊っていた踊りが実は楽しみのためにあるのではなく、厳しい自然の北海道で生きて生きていくための真剣勝負の、自然（善い神・悪い神）との駆け引きであったこと、お祈りのあとに神に「ありがとう・イヤイライケレ」も「神よ、私の悪霊が自ら命を絶つようにしてください」という駆け引きであった。

② 私たちの踊りに対して**「心が入ればよい」という一言は普段忘れかけていた心の存在を気付かされて**くれ、この言葉が私たちの心に衝撃を与えた。すべてのことに心を入れる、自然に対しても、友人に対しても、親に対しても。なかなか言葉では表現できないが、これが人間としての大切なものであるように感じる。

私たちに多くのものを与えてくれるアイヌの人々の精神文化を、もっともっと多く感じ取り、北海道に生きる人間として、自然の一部であるという自覚を持って暮らしていきたい。と結びました。

37年にわたる『上川アイヌの研究』のみちのりは決して平坦なものではありませんでした。*３枚目関連事項：70年代から80年代にかけては体を張って生徒たちを守った「冬の時代」といってもいいでしょう。しかし、このような激動の時代をのりこえられたのも部員たちがあってこそと思います。

幸いにも本間愛之先生が後を受継いでくれましたが、先生は、「アイヌの人びとの歴史や伝承文化の知識をほとんど持たない私が顧問として郷土部の火を消さずに活動できるだろうか、大きなプレッシャーを抱えてのスタートとなった。生徒と同じ学ぶ仲間としての立場で、過去の調査研究のなかから空白の部分や疑問に思うことを掘り起こし、今までどおりの体験学習を中心としたプロセスを踏むことにした」。と北海道立北方民族博物館刊行物に書いています。（「いま、35年のアイヌ文化を継ぐ実践への試み―旭川竜谷高等学校郷土部の活動から―」2002）レジュメ２枚目右）

学校教育の一環であるクラブ活動が「人間形成」を目的とするならば、ほんの短い３年間の高校生活の中で、北海

道に住むアイヌの人たちとの心と心の触れ合いを通じて多くのものを感じとり人間として大きく成長してほしいと願う気持ちは顧問に共通するものであり、基本理念『アイヌ文化を通して人間の尊厳を考える』ことは郷土部の活動が続く限り営々として受継がれていくことと思います。

ここで1972年から3年間、活躍した梅下忠弘君の手紙の一部をご紹介し結びといたします。なお、*本文は1991年9月3日付、北海道文化財保護協会『文化情報』第114号に掲載されたものです。

何よりも今になって一番感謝していることは、高校の部活の中で先生から自然な形で、物事を研究し追求していく姿勢をうえつけていただいたことです。郷土部の活動があったからこそ大学時代にきちんとした考えをもって物事を考えることが出来る人間になれたと思っています。もし、高校時代に先生と出会っていなければ、現在の私はなかったでしょう。先生は細かいことはあまり言わずわれわれのやりたいようにやらせ、なおかつ、研究することの素晴らしさや、ひとつの事をやり終えた満足感と希望を与えてくださいました。

35歳に近い（現在、48歳）今もなお、いろいろな状況にぶつかるたびにこのことが生きる支えとなり力づけられています。「北海道文化財保護功労賞」の受賞は嬉しかったです。今でも自分のプライドであり、内的エネルギーとなっています。　デスクワーク、フィルドワークとずいぶんかけずりまわりましたね。本当にありがとうございました

―旭川竜谷高等学校学校郷土部活動目録―

その１	近文アイヌ墓地の墓標とその形態	昭和42年	(1967)
その２	近文地方における住居	昭和43年	(1968)
その３	近文地方を中心とした食生活―動物・植物・食器―	昭和44年	(1969)
その４	近文地方における衣服文様	昭和45年	(1970)
その５	はきものと交通	昭和46年	(1971)
その６	アイヌ語地名からみた交通路―ル ru 道を追ってNo.１―	昭和47年	(1972)
その７	チタラペ citarpe 花ゴザを編んで	昭和48年	(1973)
その８	アイヌ語地名からみた交通路―ル ru 道を追ってNo.２―上川～美瑛～ルベシベ―	昭和49年	(1974)
その９	生活と植物（資料編）―旭川竜谷高等学校「アイヌ植物園」収集目録から―	昭和50年	(1975)
その10	生活と植物（利用編No.１）―ムックル mukkur 口琴を作る―	昭和51年	(1976)
その11	生活と植物（利用編No.２）―花矢　エペレアイ epere ay 子熊の矢を作る―	昭和52年	(1977)
その12	魚 cep 我ら食うもの	昭和52年	(1977)
その13	生活と植物（利用編No.３）―漁具　ラオマプ raomap ―	昭和53年	(1978)
その14	鳥 No.１ カラス　パシクル paskur	昭和54年	(1979)
その15	子供の遊び	昭和55年	(1980)
その16	続子供の遊び	昭和56年	(1981)
その17	イフンケ ihunke 子守歌	昭和57年	(1982)
その18	生活と植物（利用編No.４）―狩猟具　アマック amaku 置く弓を作る―	昭和58年	(1983)
その19	オオウバユリ　トゥレプ turep の根（鱗茎）の調理加工とでん粉の精製について	昭和59年	(1984)
その20	古式舞踊Ⅰ―文献から―	昭和60年	(1985)
その21	古式舞踊Ⅱ―ウエカップウポポ・チカップウポポ―	昭和61年	(1986)
その22	モウル mour 肌着を作る	昭和62年	(1987)
その23	チシポ cispo 針入れを作る	昭和63年	(1988)
その24	ヤラス yarsu 木の皮の鍋を作る	平成元年	(1989)
その25	ヤラチプ yarcip 木の皮の舟を作る	平成２年	(1990)
その26	イナウル inawru・サパウンペ sapaunpe アイヌの男たちが被る冠	平成３年	(1991)
その27	ユクケリ yukkeri 鹿皮靴を作る	平成４年	(1992)
その28	近文地方の食生活―シケレペ（キハダの実）の調理加工―	平成５年	(1993)
その29	近文地方の狩猟生活―狩猟具　アマック amaku 置く弓を作る―	平成６年	(1994)
その30	近文地方の漁撈生活―漁具　マレク marek 鉤銛を作る―	平成７年	(1995)
その31	近文地方における住居―近文地方の住居　チセ cise のミニチュア復元―	平成８年	(1996)
その32	古式舞踊Ⅲ　―文献調査―	平成９年	(1997)
その33	古式舞踊Ⅳ　―エムシウポポ・ウコウク―	平成10年	(1998)
その34	子供の遊びⅢ　―エルムウポポ・ホーチップ・モムモムモム―	平成11年	(1999)
その35	男の踏舞　―タプカラ tapkar ―	平成12年	(2000)
その36	アイヌの子守歌Ⅱ　―パッカイ・イフンケ pakkai－ihunke ―	平成13年	(2001)
その37	エペレアイ　花矢からみたイオマンテ	平成14年	(2002)
その38	―ムックル mukkur 口琴を作るⅡ　―ムックルからみたアイヌの人々の精神文化	平成15年	(2003)

―旭川竜谷高等学校学校郷土部活動目録―

昭和46年	旭川市文化奨励賞受賞	
	北海道開拓記念館主催　北海道高校郷土研究コンテスト	優秀賞受賞
昭和47年	北海道文化財保護功労賞受賞	
昭和50年	北海道高等学校文化連盟郷土部10周年記念表彰	
昭和59年	北海道高等学校郷土研究発表大会	優秀賞受賞
昭和60年	北海道高等学校郷土研究発表大会	優秀賞受賞
昭和61年	北海道高等学校文化連盟結成30周年記念表彰　顧問功績賞受賞（福岡イト子教諭）	
	北海道高等学校郷土研究発表大会	最優秀賞受賞
昭和62年	北海道高等学校郷土研究発表大会	優秀賞受賞
昭和63年	北海道高等学校郷土研究発表大会	旭川市長賞受賞
平成３年	北海道高等学校郷土研究発表大会	優秀賞受賞
平成４年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	優秀賞受賞
平成６年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
平成７年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
平成８年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
平成10年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
平成11年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門（平成12年度　全国高等学校総合文化祭代表校決定）	最優秀賞受賞
平成12年	全国高等学校総合文化祭郷土研究部門民俗・文化分野	最優秀賞受賞
	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
	旭川市教育委員会教育奨励賞受賞	
平成13年	北海道高等学校郷土研究発表大会考古・民族部門	最優秀賞受賞
平成14年	全国高等学校総合文化祭郷土研究部門民俗・文化分野	文化連盟賞受賞
	北海道高等学校郷土研究発表大会郷土研究部門	最優秀賞受賞
	北海道高等学校郷土研究発表大会郷土芸能部門（初参加）	優秀賞受賞
平成15年	北海道高等学校郷土研究発表大会郷土研究部門	最優秀賞受賞